



「毒母」という 役割を担わされる母たち

大野るい

私は、私自身でありたい。

私は、私を一人の人間として見てほしい。
子どもを支配する「毒母」ではなくて。
私を「毒母」に閉じ込めないで。
私は、ずっとそう言えなかったのだ。

「不安障害になるような人は、母親との関係に問題がある人が多いんですよ」と、カウンセラーが娘に言ったのだそうだ。

クリニックを受診したとき、娘は、仕事の上で困難を抱えていた。

他者の期待に応えようとするのと、自分が表現しようとするものとの齟齬。食事や睡眠もうまくとれない。慢性的な頭痛や胃痛。そういう状態だった。

「お母さんは放任だったよね？」と娘は不思議そうに私に言った。

（あなたは天然だったよね？）と私は思ったけれど、それは私には楽しいことだった。

娘が、カウンセラーに体調の悪さや気持ちのつらさを相談したとき、カウンセラーは、仕事の大変さや人間関係をどう見ていたのだろうか？

「お母さんのことが出てくとは思わなかった。お母さんが問題だったんだ」

専門家に言われたことは、とても大きな力を持つ。

そして、いろんなことは診察室の外で起きる。同

情、非難、告げ口、あの人がこう言った、この人がこう言ったということが起こる。

そういう中で私たちは皆、うまく話ができない。感情的になり、矛盾だらけで、舌足らずで、話がすれ違う。誤解が生まれ、手も足も出ない。

トンチンカンなやり取りの中で、母親と距離を取れるという流れができる。「支配する母親」から逃れるために娘は関係を絶つ。

病院に勤めていた私の友人は言った。
「人生で何かにつまずいたとき、子どもはみんなお母さんのせいにして乗り越えてゆくんだよ。普通の診療だよ」

心配する母、干渉する母、「すべての母親は毒母である」と言いたくなるのも、「母親は、はた迷惑」という言い方もわかるけれど、自分の子どもを支配などしたくないと思っている多くの親は、体も心も壊れると思えるようなときでなければ干渉はしないだろう。

その上でなお、母親たちは「毒母」と言われることも受け入れる。

「それでうまくいくならいいよ」と、まるで人間ではないかのような呼び方も受け入れる。

私が私であることを奪われたようだと思いながら。

その毒は、悲しみとともに、受け入れた自分にじわじわと効いてくる。

私はいつ、子の人生を奪い支配しただろうか？

未熟な子育ては、そんなにも毒だっただろうか。子育ての失敗や過ちは、子にとっては許し難いものなのだろうか。そんな反芻が、幾重にも、私を「毒母」に閉じ込める。

もう30年近くも前、書評を読んで購入した『心的外傷と回復』という本がある。

その中に「一般に思い込まれている『虐待の世代間伝播』に反して、圧倒的多数の生存者（虐待体験を生き抜いた人）は自分の子を虐待もせず放置もしない。多くの生存者は自分の子どもが自分のに似た悲しい運命に遭いはしないかとしんそこから恐れており、その予防に心を砕いている。経験者たちはしばしば子どもたちのために自分のためには振るえなかったケアと保護の能力を動員することができるようになっていく」とある。

ここは書評でも紹介されていたところで、このことに励まされた女性は多いと思う。30年前の私も、この本の中でこの文章に出会うために、それまで縁のなかった「心理学の専門書」を購入したのだ。この本を読み、心に刻んだのは専門家ばかりではないと思う。

しかし、あれから30年、世の中には、毒親本や漫画が溢れかえり、母親への眼差しは厳しい。

気になるのは、『心的外傷と回復』の中にもあったように、親との関係を絶った子どもは基本的信頼の基盤を失うことにならないかということだ。

「いろんな行き違いや誤解があったんじゃないの」というメールも出したけれど、返事はない。今はパートナーと穏やかに暮らせているようだから、もう気にしなくてもよいのかもしれない。

そして、ある日、ふと気づく。

母親は、この社会の中で、不自由を押し付けてくるものの受け皿になっているじゃないか。

若い人が、食事もとれず睡眠時間も削るような働き方をして自分を追い込み、バランスを崩していくとき、このままでは体も心もどんどん壊れていくということを、親は先取りして心配してしまう。すると「支配」と裁かれる。うまくいかないのは親のせいにされる。

母親たちは、この社会の一番底で、批判され、石を投げられ、孤立しながら、「毒母」を引き受けることで、それら不自由を押し付けてくるものを免罪している。

どうして私は「毒母」なんか引き受けたのだろう。

誰一人「毒母」なんていないのだと思う。「毒母」と名指される一人ひとりの親を見れば、そこには助けが必要な困難な事情を抱えた人がいるだけだろう。

人の苦しみに、自分自身を生きられないということがある。

創造の歓びのうちに創ったものが否定され、あるいは変更が求められ、自分にとっての輝きと意味を失っていくことはつらいことだ。自由に息ができなくなっていく。

たった今も、競争の激しいこの社会で、若い人たちは自分を表現したいと思っている。でも、ニーズに応え自分を変えないと受け入れられない世界もある。

限りなく自分を譲り渡していくとき、どんなに気持ちもちが萎えていくか。

それは、言葉にしにくく、伝え難い。

診察室では、そんなことにも耳を傾けて欲しいと思う。大切なことに気づくために、一つの思い込みに流れるようなことはしないでほしい。

『心的外傷と回復』から30年を経て、ジュディス・ハーマンの『真実と修復』が著され、今、翻訳が進んでいるところだという（2024年7月現在、みすず書房より刊行済み）。記者の阿部大樹さんが『世界』の1月号に書いておられ、その一端を知ることができた。

フィールドワークを終えてハーマンが書いていることは、傷ついた人たちが求めるのは、真実の認知と構造を改めること。構造が変わらなければ、また同じことが起きるからだ。

日本の社会に広がる「毒親」「毒母」という言葉から受け取る憎しみは悲しい。投げかける方と投げかけられる方、双方に大きな傷と壁を作ってしまう。

取り上げられずにある現実の疎外から目をそらせてしまう。

私たちが自由と共存に至るには、いろんな人の想いに耳を傾けることが必要なのだと思う。

そして、俯瞰的な認識に至ることが、人を自由にするのだと思う。

対話やオープンダイアログがもたらすものは、そういうものなのだろう。

一人ひとりがその価値に気づけるといい。

そして地球上のあらゆる場で、対話的な世界が訪れることを願う。

今、10年近い年月の経過とともに私がこんなことを思いはじめたのだから、彼女もまた彼女の場所で、決して手放すことのなかった大切なものを再び育て、表現しようとしているのではないだろうか。

それは、人が生きることと不可分だから。 **精**

『真実と修復』の出版を待ちながら

2024.2.5

